

世界紀行文学全集

13

樺太・朝鮮・台湾・南洋諸島

—— 志賀直哉 ● 佐藤春夫 ● 川端康成 ● 小林秀雄 ● 井上靖

ほるふ出版

世界紀行文学全集 第十三卷

樺太・朝鮮・台湾・南洋諸島

監修

志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖

発行日

昭和五四年九月一日 発行

発行所

株式会社はるぶ出版

東京都新宿区新宿二十九・十三

電話(〇三)三五四・七〇三一(代)

代表 中森詩人

総発売元

株式会社はるぶ

東京都新宿区新宿二十九・十三

電話(〇三)三五六・六二二一(代)

製作

東京連合印刷株式会社

目

次

柳田 國男	樺太紀行……………	三
長与 善郎	シスカの一夜……………	二
北原 白秋	安別……………	一六
	真岡……………	二七
	多蘭泊……………	二九
林 芙美子	樺太横断……………	三
	樺太への旅……………	四
高橋 新吉	樺太紀行……………	三
	樺太の海……………	四
	豊原と真岡……………	五
	オタスの杜……………	三〇
	多蘭泊……………	三
朝鮮	平壤より義州……………	四
徳富 蘇峰	朝鮮雜観……………	五
谷崎 潤一郎	新羅の故都……………	六
	百済の故都……………	七〇
大町 桂月	夏の新羅山……………	七
	曾遊京城……………	七
石井 柏亭	箕城漫筆……………	八五
	車灘川……………	八
田山 花袋	朝鮮の行楽……………	九
浜田 青陵	慶州の瑞鳳塚……………	一三
	立たれた後……………	一三
小杉 放庵	慶州記録……………	一四
石川 欣一	廿四時間の朝鮮……………	一四
保田 与重郎	慶州まで……………	一五
	扶余……………	一五
小林 秀雄	慶州……………	一六

安倍 能成	京城雜記……………	一三	京城風物記……………	一七	金剛山の風景……………	一七
高橋 新吉	半島遊記……………	一七	新羅の古都……………	一七	古墳……………	一七
足立 源一郎	雪の金剛山……………	一八	温突……………	一八		一八
火野 葦平	板門店……………	一八	北朝鮮女性点描……………	一九		一九
藤森 成吉	平壤……………	二〇	板門店……………	二〇	地下劇場等……………	二〇
	作家大会……………	二四				

台 湾

川島 理一郎	台湾風物記……………	二六
徳富 蘇峰	台湾遊記……………	二九
安倍 能成	台湾風景……………	三三
高浜 虚子	台湾……………	三七
中川 一政	美わしの蓬萊島 ^{フオルモサ} ……………	三六
浜田 青陵	台湾遊記……………	三九
野上 弥生子	台湾……………	三九

南洋諸島

田口 卯吉	グムの舞踏会……………	三三	ヤップの石貨……………	三四
矢内原 忠雄	南洋群島旅行日記……………	三五	ヤップ島旅行日記……………	三三
川端 龍子	南洋を描く……………	三九		三九
梅棹 忠夫	南洋紀行……………	三九		三九

執筆者・出典一覽……………三六四

地 図 樺太、朝鮮、台湾、南洋諸島……………卷末（折込）

地図作製 玉木 進一

台 樺

灣 太

• •

南 朝

洋 鮮

樺太

樺太紀行

柳田 國男

はしがき

是は今から五十二年前、日露講和の次の年の九月に、樺太島の中部高原と、西海岸の一部とを巡回した日記である。北海道の方では新たな産業政策の計画に着手する際とあつて、床次荒井などという内務大蔵の大官たちが、下検分に行かれる尻に付いて、始めて自分も此方面を見学してゐた。其あと一行と小樽で別れて、樺太へ一人で渡つたのも計画であつたが、この方には予想に反したことが幾つもあつた。第一にこちらには小さくとも戦があり、その後始末の付かぬうちに雪になつて、翌年の雪解まで待たねばならぬ仕事がつさりあつた。第二には人手があまりにも足りない。北海道の方には開拓が始まつて、永住の農家が追々と増して来たが、こちらは春来て秋還るといふ、燕見たような漁民ばかりが多く、稀には隣の北海道から流れて来ようとする文字通りの移民もあつたが、

この衆の狙つて居るのは今少し大きな儲けばかりで、よほど条件をよくしても落付いて爰に住もうという者が得にくかつた。現在は定めて方式が改まつたろうが、以前の露西亞からの強制移民というのは、他でなら死刑を課せられるほどの、極悪の無期流刑者と、その後裔の者が主であつた。どういふ風に話を付けたものか、それをそっくりと対岸の何れかへ送り返すことにきまつて、迎への船の来るまでの間、かなり久しいこと大泊に集めて保護して居た。それがついこの間やつとのことで還つて往つたという処へ、私は入つて行つたのである。

しかも村々にはほつぽつと、まだ話の付かぬ者が残つて居たのである。言葉の全く通ぜぬのをよいことにして、こやつ come 歴は斯う斯うと、殆ど信じ難いような話をするとも知らず、ただにこれにこと笑つて居るのを見ると、こちら迄が段々と淋しくなるような気がした。是は何でももう一度、もっと落付いた頃にやつて来て、是から後の事を考えて見ることにして、今度は地形と天然の豊かさを味つて行こうという氣になつて、さつさと通り過ぎてしまつたのだつたが、それも結局は実現しなかつた。

この日記の中にも片端は書き付けて置いたが、生活の歡喜は寒い国に行くほど、前後を忘れしめるほど強烈なものがあるらしい。僅かな徒渉場の砂川の辺に立つと、数え切れないほど多くの川鱒が、背中を半分出して水上へ昇つて行くかと思ふと、一方にはもう力が衰えて平

たくなつて流れて行くものがある。鯉の滝昇りまでは絵そらごとかも知れぬが、この辺では海からもう遠いのになお遙々と子を産みに上つて来るのである。アイヌたちの部落を遠くから見ると、小屋も隠れるばかり沢山の魚が乾してある。それを冬中の食料にして、あの樺太の橋犬は育つて行くのださうである。

一方には又樹の倒れた林の間に、聴いても覚えきれぬほど多種類のベリーが熟して来る。今はまだ花の方が多いが、やがては小鳥や虫にも喰いあまされて、際限も無く次の代を作るらしい。オコック海の浜まで出て見ると、そこは又一面のハマナスの叢であつて、一株の中に蕾から花、花からよく熟した果実までを着けていて、人は却つて近よつて見ようとせぬのであつた。

話が長くなって「はしがき」とも言えなくなつたから、もうこの辺で一応は切上げる。此あと書いて置きたいと思うことがまだ三つ四つあるが、それは折を見て此あとに書き纏いで置くことにしたい。

(昭和三十三年五月)

九月九日 朝雨、夜暴風
六時十分旭川出発の汽車にのる。ここにて同行十一人と別る。此人々はきょう名寄に行く人、大橋、前田、板内三氏停車場迄送り来る。内田定雄氏同乗、物語して時のたつを忘る。
小樽の商人戸島、大坂の人なり。同じ列車に

在りて語る。

十二時札幌山形屋着。

家より手紙、多くの状共回付し来る。

宿を立ち、中川の所へ行つて碁をうつ。細君にあう。

五時十分の汽車にて札幌を立つ。中川君送来る。嵐吹き雨烈し、明朝船出ずるや否や心つかわし、七時近く小樽越中や着。内田氏の案内市川道庁属、好意にて予が為にランチを求めたれども得ず。

三井の店員手塚にあう。戦時中志願兵にて出て奉天の戦に腹を傷つたり。

家へはがき。

夜、十時過船に乗れといわれてたつ。上川丸千四百噸、唯今始めて、北海道を離る。樺太の熊谷氏へ電報にて知らせる。

家よりまわし来れる手紙。中原朔洲氏より、西田教授より二通、島田俊雄より、津の三村君より桃沢君うせたりという報知。

三河の八名郡山吉田の内藤、本田より手紙。

九月十日 雲多く風すこしあり

朝の四時ねたる間に船は出でたり。夜稚内につく迄はゆれたり。同乗は大かた漁業者なり。漁業者の中にも酔いたるものあり。船の中に四、五本のはがきをかきたり。起きて甲板に上れば船傾きて倒れそうなればあわてて下りてねる。食事も定刻にする能わず、室にて珈琲、パン、かゆなどを食う。午後出でて見れば利尻島

近し。八時半稚内泊、十時半出発。きょうは終日室にありてねたり。

九月十一日 晴

早朝にアニワ湾に入り、七時投錨。

榊原支署長出迎、尾崎事務官の官舎に入りて寄寓す。

楠瀬司令官へ挨拶に行く。

熊谷長官と馬車にて市中一巡、かえりて民政署に入りて人々にあう。

夜、榊原君、和田君とクラブに行つて玉突を見る。

道家氏へ細書、北海道のことなり。

九月十二日 雲あれどあたたかなり

吉原三郎氏へ手紙。家へ手紙。

農事試作場に行つて見んと左の山間に入りしも道わからずしてかえりぬ。道にめづらしき木多し。「高ねばら」というか玫瑰の如くにて少し木たかく実赤くなり、花も単弁にてうつくしといえり。

凡そ花はつきて今は盛に実のなる時季なりとおぼし、尤多きは、紅の実の南天の如くなれる灌木到處に在り。其名をたずぬべし。

此所は、露人の建築多し。

民政署の茂木、桑名米、後日ウラジミロフカの方へ同行を約す。

午後守備隊病院の横手より山の中をぬけて大泊に行く。学校の新築さる上の山より見れ

ば、到るところ半成の家、工を急ぎ、盛なるものなり。買物す。

伊太利の軍艦入港上陸を許されず。

海岸の道をつたいてかえる。

夕司令官の処に招かれ夕食。経理部長、憲兵隊長、民政署の人々。外に東京に帰るべき士官二人招客なり。

かえりてクラブにて長官と玉をつく。

九月十三日 晴

宿舎に居て書類をよむ。

山林の係なる月居技手来り、状勢を語る。桑名技手来り明日の打合せをなす。

署に行つて片寄、矢木の二氏に調べものをたのむ。

夜長官の饗応にて第一亭というに行つて飲む。

相客は楠瀬少将、岡沢参謀(中佐) 緒方経理部長(三等主計正)、副官恒屋大尉、某中尉、憲兵隊長浦野大尉、其他通信部長なる某大尉、鉄道工事の係りなる某工兵大尉などなり。司令官は二三日中に雇汽船にて東部海岸をシッカ迄行くよし、同行をすめられたれど辞したり。民

政署の人は、和田、榊原、田村、橋本の二工学士、秋元通訳、片寄属なり。秋元はきょうウラジミロフカの支署長を命ぜられたり。

夜おそくなりてかえりてねたり。

きょうクラブにて、漁業者小倉某などと玉を突き遊びたり。

今村幸男より絵葉書。

九月十四日 晴

朝七時過に宿を立つ。同行者は桑名、茂木と、尾崎君の従者村田なり。尾中医学士の馬を借りて乗る。甚だ心もとなし。

ソロイヨフカ迄二里半は磯山の下なる渚をゆくなり。西の山に雲白く麓に沈みて朝の海さやかなり。ペリワヤパーチ、フタラヤパーチ、トンチャパーチというは第一、第二、第三の谷という義なり。ペリワヤあたりに小さき漁場二つ三つあり。

ペリワヤには近き頃迄牛馬の収容所ありき、茂木はここにすめり。フタラヤに通信部（陸軍）の分遣隊あり。軽便鉄道工事の材料を陸揚しつつあり。

ソロイヨフカには種畜場あり。もとの一村の家屋を其ま取こめて厩舎等に宛てたり。南部樺太には数千の牛馬ありしが、乱離の後官民の引き構まえて世話するものなかりし為、半数以上死うせたり。路に牛馬の骨狼藉たり。場の主任西村は米沢弁の熱心な男なり。牛馬各二頭の種畜を北海道より取よせて、更に繁殖の業を経営せんとす。

ここにコロボツクルの遺跡多し。先頃は飯島博士もあまた採取してかえられたり。事務所もあまた集めおけり。

ここより鈴谷の川に沿いて唐松林を左にして行くなり。右はひくき岡、種畜場の構内なり。鉄路の工事と道路の改修の為に労働者あまた入

込めり、路のかたえにテントを張れり。多くふとん着物を負いて往来するもの数百人にあえり。

ミツリヨフカの三浦屋という駅通にて昼食。此あたりは右左唐松のまばらなる林、幽趣心をうごかす。下草は大かた姫石楠、其芽香わしく、露人はとりて香料とせりという。又シダも多し。早かれたるが色うつくし。川の辺は湿地なり。

リストのエニチノエは、狭き谷の中に在る小村なり。

ホムトフカにコルサコフの兵、舎營せり。ここからマウカに山越をするなり。

ここに岡山県の人的場某、移住して、牛馬をかえり。北見に在りて漁業に従事せし者なり。

此村を流るるススヤの支流に鱒あまた上れり。釣場馬にて案内してもりにて突きてくれたり。潤葉樹林の中の日影うつくしく、水の音ものあわれなる処なり。魚のとりて捨てるがあまた腐れる香みじり。生殖の力はげしきは、動物も植物も同じようにて、北地一年の日数短き所は殊に著しきように思われたり。

パリシャヤエラニの村にも移住者僅かあり。露人の残れる者少しあり。露人は皆犯罪人にて人相悪しけれども、其子供は無智にいたいけにて、時としては路の側に立ちあどけなく目礼す。

ウラジミロフカ、林地を区劃して市街を設けんとす。林の中に露人の墓地あり。末は如何に

なるべきかと思う。此村今は一筋の家つづきに、露人の建てたる大なる家も少なからず、日本人の住みあふれたるものはテントをつくりて商をいとなむもあり。此頃朝夕は内地の十一月の寒さなり。

此あたりの山林は過る日火を失いたりとして赤くなれり。ここにつきたるは七時。

民政支署により、宿舎の中、竹田通訳の室にとまる。前の支署長の佐藤三吾、出来りて食事と共にす。

九月十五日 晴（土）

朝七時過ぎに立つ。

昨日の同行者の外に竹田通訳、石山属騎馬にて同行。

ルゴウオエ迄の路は草深き野地なり。昨年の戦に露軍ここにて防禦陣地を設けたる跡のこれり。露人馬を湿地に陥れて難儀せるを見る。かかることは屢々あり。

ルゴウオエの村にも移民少し入れり。村長某の家に息いて支署の人と別る。主人夫妻は不在。この村長も殺人犯なり。娘の十四五なる、名はアントニナ、牛乳、バター、チーズ、黒パンなどを出す。黒パンはやはり小麦にてつくるよし。

ノオアレキサンドルスコエには内山吉太の牧牛場あり。大なる村なり。家の数百以上、されど露人の残れる者二三人のみ。

ベレズニヤキイは丘の上の村なり。ススヤと

ナイブチの支流大タコエ川との分水点なり。此村とクレストイには露人一人も居らず。茂木の言によれば、日本の斥候二十名も殺されたる所、日本の隊長の怒りにあえるなりといえり。軍事上重要な地とおぼしく、ベレスニヤキイには分遣隊あり。其外には中村名義の駅通一戸あるのみ。

燕麦の原種かと思われる牧草乱生せる中に馬を放ちて飼う。或空屋を覗きしに酒屋なり、きたなきバーと棚あり。窓わくを青くぬれり。この駅通にて湯をわかさせ、携えたる黒焼パンを食う。

クレストイにてガルキノウラスコエの出張所長平尾及びウラジミロフカの署員尖戸のガルキノよりかえるに逢う。雨ふり出でたり。此あたり、両側の松林は久しき以前にやけたりとおぼしく、黒くなりてたおれたる木多し。牧草其間にしげれり。

ボルショエタコエにて、佐藤という牧場の事務所に息う。管理人は千葉県長生郡の人某なり。沿道此家ややうつくしければ、ウラジの大隊長の家族も遊び来り、過る日は本願寺の裏方も往復にいこわれたり。されど床はよごれたる上にゴザをしきていぬるなり。南京虫多しとして寝台は外にすてたり。

此家の前の持主は独乙種^{ドイブ}の露人マルテンという殺人犯なり。六十八にて妻もここにてもらいたる殺人犯なり。情夫の為に夫と十四になる男の児をころせし者なり。家と家畜とをうりたれ

ば明日はここを引上げて小樽よりかえるといふ。此二人の者の孫にアリウシアという十八九なる娘、ウラジミロフカの支署の傭人をしてありしことあり。通訳の渡辺という男の妾となれりなどという評あり。旅をする若者多く此女の家に息いて話をす。日本の俗謡を多くしれり。気前のよき女の子。マルテンの家の窓をのぞけば、其妻と外に一人の男あり(タアタアなりといえり)。ここへアリウシア来れり。雨ふればシオルをかぶり、更紗の袴をはき桃色の足にてはだしなり。円顔の中高の女なり。窓の中より我を見る。

此村はずれに大なる官設の水車あり。車は横にまわり軸木はたてなり。非常に荒れたり。付属品を盗みて去る者多し。

水車と道をへだてて六戸あり。其頭目かと思ふ家に入りて中の様子を見る。鰯をとりて縄に通して多く乾せり。半分は冬中の犬の食物なり。犬は各戸十数匹をやしなう。冬中ソリを牽かせてよき賃銭をとるなりといえり。

マロエタコエ。此村には加藤という人一戸のみ住めり。若き妻と幼児一人あり。

ガルキノウラスコエに近づく所にてあまたのアイヌにあり。幼児を腹に入れたる女の、杖つきて路をいそぐもあり。

此から少し出た林のわきで焼けて黒くなった木の倒れたのを熊と見て驚きし也。馬より落つ。けがなし。

村に近き水車小屋に測量部員の宿舍あり。立

寄りて古林という男にあり。北海道にて植民地区劃の事に経験ある男なり。ここにては川の水をのむ。鰯多き時は人入込みて水のにごるにはこまるといえり。酒かいてかえる者あり。

ガルキノウラスコエも淋しき村なり。人家三四戸、いわゆる後家は唯一軒。中隊あり、隊長の大尉は鰯を兵にとらせ、燻製などにして家に送るといふしれ者なり。

出張所の東という男は金沢の人、台湾にて蕃境の警察に在りしという快男子、よくあるじぶりをしたり。此島に来てうそをつかぬ男を始めて見たり。

出張所長のるすの室にねたり。有海という通訳、土方のような男。

九月十六日(日)

朝東同伴してドヴキイに行く。マロエチキノという村を過ぐ。ナイブチ川の岸には小村多し。ニコライエフスコエにはアイヌも住めり。土地肥えたり。

此あたりの山林三里四方もやけたり。近頃のことなり。

ナイブチ川水みちてゆたかに流る。下流なれば小石一つなし。水草のしげりたる川あり、此あたりの小川幅一間ばかりなるも鰯あまた上れり。馬之^{ウマ}を見ておどろく。路にてニコライエフスコエのアイヌ近藤太郎(ワシリ)、ナイブチの仙徳清之助、ロシニの中島宗太などにあえり。仙徳と中島は日本人との雑種かもしれず。

ドブキイにも移住者あり。駅通をするものきたなき家にて昼食を取る。

サカイはまに往く路に玫瑰あまた咲けり。ツボミもあれば赤き実も多くつけり。渚に近き草野に堅穴のあと多し。

オロチョンはコロボツクルと同種ならんと栃内君などはいえり。従者にほらせたれど砂のみにて何も出でず。

サカイはまにて山本己之助の漁場を訪い、管理者小林にあり。これに案内させてアイヌの家を二三戸訪いたり。男は皆不在なり。物も言わで烟草のみのみであり。若き娘はさすがにやさし。我々を見てかくれたり。子供に菓子やる。漁場では露人アイヌを使役す。酒、煙草を与えて利を見、尤亡状なるを常とす。山丹人というはギリヤックか、又は其雑種なるか。年々マキリ其辺の器物を携え来りて、アザラシの皮などを買いてかえるという。

ここよりドブキイにかえり、北の方ナイブチに行く。ここにもアイヌの家を見たり。仙徳清之助の家により、其母と妻とにあり。

官の補助をうけ、ナイブチの渡の渡守をなせり。此家は窓のこしらえなどよほど露人をまねたり。写真はあまたあり。主人は二十一の頃北海道にてうつせしという写真は、まるで日本人のようなり。

川の渡の所までゆきて見たり。北方の海岸のぞむ。山立並びて処々低き唐松の岡あり。海岸にははまなす群生して花うつくし。浜麦とい

う草を馬喰う。五葉の松多し。夏はあやめ多く花さきうつくしという。此道にも堅穴あまたあり。

ドブキイにて見たる女よく肥えて十七なりといえり。雪のある頃マウカよりアイヌをつれて山越せるより、熊というアダナあり。漁場の男はマグロという。肉にたるみなく、よく肥えたればなり。顔かたちも見苦しからず。至るところジドラクにて追出され、何処にてもいとおる。樺太に来て宿無しとなれる十七の女ありと思わざりき。

ドブキイの浜は波あらく磯あれども、東海岸の船つきなり。漁場にかよう蒸汽船の難儀は想うに勝れたり。

帰途マロエタコエのあたりより雨に逢う。雷なる。烈しくなりてより馬をはせたれど及ばず。雨具は荷車につみておくれたり。肌までぬれとおれぬ。夕方ガルキノにかえりて乾しなどす。

昨夕の古林来り、絵図などを見せて、測量の状況をものがたる。

九月十七日(月)

朝立たんとすれば馬三頭にげたり。パヴロスコエの方へ追行てとらえたる為におくれたり。東君同行。道に雨にあり。このたびは雨具あり。されど道はなはだぬかる。

ベレズニアキイにて、わびしき黒焼パンのひるめしを食う。此あたりよりは雨無く、道やや

よし。

ルゴウオエにて日くれたり。野地の中の道を馬を戒めてゆく。七時半にウラジミロフカに着きたり。

秋元支署長来てあり、一昨日の室に同宿。主人竹田は桑名と共にクラブに行てねたり。

九月十八日 晴

支署の突戸の案内にてブリジネエよりトロイツコエに行く。馬は金靴をかえる為に置きたれば一日歩行。二里あまりの路なり。

ブリジネエには浄土宗の布教師花車円瑞が管理せる小学校あり。十七八人の生徒、此前にある鐘は露国の寺院のものなり。

トロイツコエへの路は半ば迄松林の中なり。湿地なれば木材をしきつめて路とす。熊出でたりという話をしてありく。姫石楠多し。

トロイツコエの村人葉閑多きにより官の為に草を刈り、其代に南京米をもらう。きょう之をとりてコルサコフへ行く。惣代も村民も共に行く。

移住者は此年のもうけ不足なれば家を整え作物を植付けて後に、出稼ぎに出たるもの多し。

トロイツコエの試作場を見る。燕麦めきたる牧草しげりて麦其他の作物をさまたぐ。豆小豆は面白からねど少し出来たり。玉蜀黍もあり。薄荷をつくり試みたるものあり。

此後を流るる川に鱒を求めたれど既に下りて在らず。糸を垂れて山べ、あめまず、岩なをつ

る。一時間がほどに百あまりを得たり。昼食に食べたり。隠元のさやまめ、馬鈴薯、赤大根など。

此村に移住せる紀州那賀郡の人西風信之助は西風重遠の弟なり。釜山の書記生、商船の社員などもしたることあり。此村に来てより妻は従者とかけ落ちたり。独身にて農を営み、いともにはかかる本もよめりとて、帝國文庫の高僧実伝を示す。

露人の病院にせんとしたる建物、今は測量部員の宿舎となれるに立寄る。行く行くは学校役場に宛てんといえり。村人の家二三戸を訪えり。

夕方ここを出でてウラジミロフカにかえる。今夕稲垣という通訳と泊り会わす。秋元の友人なり。川崎理学士と共に北方の山々をめぐるなりとて奇談多し。途中糸と針とマッチなどなくなりてこまりしこと、米の屢々たえしこと、險阻に臨み荷物を山より投げ下す為に鍋の屢々損ぜること、山鳥を手取りにすること等、おどろくようなことばかりなり。

夜この中樺クラブというに行て、竹田と玉をつく。憲兵隊の瀬川少尉という老人にあう。

九月十九日 晴 朝夕は中々さむし(水)

八時半にここを立つ。桑名、茂木には昨日、ブリジネエにて分れしなり。

馬にややなれて時々走らすことをえたり。ミツリョフカの三浦にて例の昼食。

一時にソロイヨフカにつきたり。種畜場の吉川という男の案内にて、海岸の貝塚をはりたれど何もえず。丘の上のをこころみたれど、骨製の針一を得しのみなり。

道普請にて馬を下りたる所多し。種畜場の西村は不在。コルサコフへのかえり道にてあう。海さやかに晴れたり。四時前ソロイヨフカを出でてかえる。

ペリワヤバーチより山路をとおりてかえる。六時前着。

昨日ときょうと漁場の入札。来年度の継続及料金引下を見越して大景気の競争なり。五万円ほどと思ひし十七カ所の入札一番札四十何万円となる。

長官漁業家の重立ちたる人を饗する会に列席。笹野(水産組合長?)、藤山(北海道の天塩に農場を有せる人)、村上、米林、中山、桂、小倉、前田、吉松、米田、小林、郵船の小寺など客なり。和田、榊原、田村、食後此人々の主する宴会あり、招かる。又第一亭なり。おそくなりてかえる。

飯田の伯父上より手紙。五十度近くへ行きたりと思ひたまえり。

九月二十日

理髪。

夕八時天晴丸にてマウカ行。

同行は長官、橋本工学士、片寄、林。マウカの医務官片岡、片岡は出石の人池田謙斎の婿。

ノトロ迄は静にて、岬をかわすよりややゆれ出す。おのれはよくいいねたり。

九月二十一日

きょうも船の中なり。何も食わずしてよくいいねたり。

五時頃マウカ着。

支署の吏員、町の人々三半船に国旗をたてて迎に出でたり。

かこのかけ声はいさまし。櫓は六挺なり。

守備隊の行軍あり。宿屋は皆ふさがりたれば、長官以下は支署長森良綱の宿舎に、橋本と手とは、金沢辰次郎の新成の商店に投宿す。

夜官舎の方に行て入浴す。谷川を隔てたる丘の陰にて、泉の水を鯉釜に入れてわかしたるものなり。竈のみは煉瓦なりしかど、錨を三つ合せて代用せるもありといえり。

九月二十二日

風あらくして、終日船を出すこと能わず。支署に行きて事務を見る。市中を散歩す。

明治の初年樺太開拓使の出張所ありし丘の上を相して、支署新営の計画あり。

此あたりセシヨノフ、デムビの漁場にて、露風家屋のやや見よきもの少し残れり。

鹿野商店が試みたる畑地には、胡瓜、南瓜、菜豆、玉菜などよく出来たり。

夜西谷の倉庫にて歓迎会。主人側百二十人なり。経理部長浅野、ガルキノの中隊長飯田など

も加われり。

其くずれ、ところをかえてのむ。「あけぼの」には先日函館の勝田にて逢いし田島の知れる小児来てあり。行きて見ればよく記憶せり。田島へ絵ハガキを出す。

九月二十三日

きょうも風にて船出です。

昨日もきょうも鍊釜の湯に入りたり。町の者山下、辻など来て状況をのぶ。

コルサコフにおける吳澄良一という者も訪い来る。

夕長官支署員を招きて、丸万に宴すとて予も招かる。

片岡に誘われて百足屋という家にも行きて見たり。主人は有志者の一人なり。前齒かけたる男。

九月二十四日 彼岸中日

けさ出さんといひし船又出です。何もせずしでくらす。

山下、奥村などという町民陳情に来る。

午後長官と暮をうつ。片寄とも、不思議にも自分の方が強し。

天晴丸の船長の上り来て船出せんという。

橋元と二人丘の上より海を望む。

六時過ぎ船にのる。波あらし。

船は北の方クシュンナイに向う。

九月二十五日

クシュンナイの沖には着きたれど、磯荒れて小舟をよぶこと能わず。岸には電報によりて、出迎えた人多けれど、ものいう声も聞えねばすべなし。

石川というクスンナイの雇員に買われたる十六七の女、秋田の者のよし。一人女なりとて船中一同より忌まれたりし。岸には石川も来て在るらんになどうわさす。

日くれたれど空しく待つのみ。やがて岸にも灯をかかげたり。見わたせば、少し入込みたる五六戸のさびしき村なり。

浅野、飯田の二氏も此より上陸する考えなりしも、すべなくて其まま錨をあげ、船は夜ふけに引かえす。風烈しく方向定らず。

九月二十六日

北の方ナヤシへ行くつもりなりしも、此の如くなれば、如何ともすべきようになって引きかえす。

マウカのあたりも雨風にて見えす。さしも送り迎えせし町の人も知らぬなるべし。

正午頃此前を過てなお南す。時々雨又はあられ、風は西になる。

夜に入りてノトロのあたり、晴れて月うつくしく、波は甲板よりもたかし。大まわりして湾内に入る。

くるしくて横になりてあれど、よくはねられず。

九月二十七日

湾内はやや静かにしてねられたり。

三時頃より食堂の人身に目ざめて話の中にまじりたり。

八時にコルサコフに上陸す。

尾中、横田の二君は十三日に帰りにあり。

榊原君は馬にけられたりとてねてあり。森本、内山などという政友会の議員五人渡来、昼食の時あり。

午後先日の茂木来。

ウラジミロフカの秋元も昨日より来て居る。

夜横田君と暮をうつ。

長官と話をしふけてねたり。ここち少しよからず。

九月二十八日

朝馬にてウゴリナバチの試作場を見る。桑名案内。

まわりの山に松茸初たけありといえど、香気少なく色も白くうすし。同じものと思われず。もらいてかえる。

午後病院に行きて尾中氏にあり。

クラブにて玉をつく。

囑託の辞令をば付与せらる。

夜宴会、森本、丹後、奥野、青柳、吉山の五議員、其他は家の人、司令部の田原、天野、浅の、浦のなどという軍人。ふくるまで面白く話

す。

又出でて玉をつく。相手は浦の及び竹田なり。又あすの船出如何にと思いつつねたり。

事務の柳瀬に調べものをたのむ。

九月二十九日

桑名来訪。

東京の小林書記官へ報告的の書状を出す。

午後司令部に天野を訪う。不在。田原大尉を訪う。共に写真をとったり。

橋本竹田の宿舎を訪い、夕食に牛なべを御馳走せられたり。

竹田は二十九年より占守にわたり、三十五年頃まで千島と往来せし報効義会々員なり。面白き北洋の話をききえたり。

竹田と共にクラブにて玉をつきたり。

九月三十日（日）

浅野経理部長を訪いて話をきく。

田村技師を訪う。恰も引越にて不在。此家に北部より引上げる露人の一族あり。子供日曜なれば鮮かなる衣をきて、日あたりよき所にて遊ぶ。

けさは水をみたりという。日中のみはあたたかなり。

夜井上子爵を第一亭に訪いて酒宴、子爵は昨日の釧路丸にて着。きょうウラジミロフカに馬にて往復されたり。元氣おどろくべし。

榊原と共に又丸吉という青楼に行きてのむ。夜、雨ふる。西の風つよくさむし。おそくかえ

十月一日

風あれたれど終に船を出す。

朝のうち田原大尉、鉾山部の緒形など来て話す。

ガルキノの東^{ひがし}はやめられそうなり。近因は予に在り。心に関する。

一昨日田原氏ととりし写真変てこにも出来たり。

船の同乗者は井上子、大坪（富山より来れる漁業者）、西派本願寺の布教者薬師寺某など。

アニワ湾頭の山、一角に雪ふれり。けさより急に寒し。

午後二時出帆。

代議士連は御用船盛運丸にて先にたつ。やがてノトロの前にてのり越したり。

十月二日

波あらし。十一時迄ねたり。

一時半小樽着。

井上氏と共に炭礦の船にて手宮に上陸す。

郵船の社員土方にあう。姫路の人旧識ありといえど忘れたり。

昨日落成式を挙げたる郵船の支店一見。支店長某にもあう。

手宮にて石壁の奇文字を見る。赤くそめて見やすくしたり。

越中やに投宿す。

電報。処々へ小樽の絵葉書をおくる。
楠瀬少将の一行同宿の由。
夜大坪来り話す。よき男なり。

（明治三十九年）